

ぼくたちにとって「原爆」とはなんだったのか？

あ る 晴 れ た 夏 の 朝

原作|| 小手鞠 るい
「ある晴れた夏の朝」(楳成社刊 文春文庫刊)
脚本・演出|| 北村 直樹
(人形芝居ひつじのカンパニー)

美術・乗客雅寛
照明・若狭慶大
音楽・音響・内田アタチ
衣装・木場絵理香

宣伝美術・伊藤祐基
写真・服部義安
映像・山内崇裕
写真出典元: Wikipedia・時事通信フォト



〒465-0018 名古屋市名東区八前一丁目112番地
TEL.052-772-1882
FAX.052-771-7868 www.urinko.jp info@urinko.jp

劇団うりんこは1973年、プロ劇団として創立。うりんことは「イノシシの子ども」のこと。猪のように子どもたちのところへ真っ直ぐ走りたいという願いを込めて付けられました。以来、愛知、岐阜、三重の学校を中心に巡回公演を続け、今では活動は全国、海外に及びます。1986年には「うりんこ劇場」をオープン。子どもたちが自らの力で自らの未来を創っていく「糧」になるような演劇を創りたいと活動を続けています。



平和の本質に迫る、

原作「ある晴れた夏の朝」

(小手鞠るい / 偕成社刊)

- ◎第68回小学館児童出版文化賞受賞
- ◎第65回青少年読書感想文全国コンクール中学の部課題図書
- ◎世界優良図書リスト『ホワイト・レイブンズ』2019年版に選出

story ものがたり

アメリカに住む日系アメリカ人のメイは、サマースクールの一環として行われる「公開ディベート」に参加することに。テーマは「原爆の是非」。

8月の毎週土曜日、人種の違う8人の高校生が肯定派・否定派に分かれてディベートする。各チームで原爆投下の背景を調べ上げ、勝負に挑んだ彼らだが、討論を深めるにつれ、複雑に絡み合った歴史的事実を思い知る。

真実か嘘か、加害者が被害者か、人種差別、偏見、日本人が犯した過ち……。戦争の裏側と平和の本質に迫り、迎えた最終ラウンド。果たして、ディベートの終着点は……？



白熱の 4ラウンド!

message

劇団うりんこからのメッセージ

誰もが「戦争は嫌」「平和は尊い」と言いますが、世界中から戦争がなくなったことは未だありません。私たちは、戦争が原因の犠牲や被害、悲惨な結末について、多くの学習機会を与えられてきました。そして、その度に心が痛くなりました。

しかし、戦争は外国での出来事で、正直自分事には感じられません。ただ自分事に感じられないから無関係でいようとしても、戦争が起きれば生命の危険に合うのは自分です。

なぜ、人類は戦争をするのか？
この問いに明解な答えは見つからないかもしれません。戦争をする原因や理由は多種多様で複雑です。

『ある晴れた夏の朝』は様々なルーツをもつ高校生たちが、なぜ戦争をするのか?と自分事で考えた過程がドラマチックにえがかれています。

「なぜ戦争をするのか?」「平和とは何か?」を私たちと一緒に脳みそがとけるほど考え抜いてほしいのです。

日本は戦後78年が過ぎました。でも、無関係ではられない。なぜなら、世界はまだ平和から遠いのです。

私達は原爆投下を認めません。

私達は原爆投下を認めません。あれは絶対に間違っていた。

目には目を、歯には歯を、そういう考えがある限り、俺たち人類に平和は訪れない。

原爆投下は最初から決まっていたんです。

原爆投下の根底に、人種差別があったんじゃないかと。

メイ・ササキ・ブライアン

ジャスミン・リロ

スコット・バーグ

ダリウス・トールマン

スコット・ハ



日本は原爆の被害者づらをするのをやめて欲しい。

「リメンバー・パールハーバー」この言葉をボクは決して忘れない。

日本は、ナチス・ドイツの同盟国ですよ！

戦争なんて大嫌い。望むのは世界平和。

原爆は「悪」ではなくて「必要悪」なんです。

エミリー・ワン

ケン・カワモト

ナオミ・コーエン

ノーマン・ブライアン



原爆を落とした側であるアメリカの高校生8人が企画した、原爆の是非を問うディベート大会。まるで文化祭のような派手なオープニングから始まり、肯定派・否定派に分かれた両チームの4ラウンドに渡る舌戦の火ぶたが切られます。高速でやり取りされる言論のパスは、時にエネルギーに、時に論ずるように。アメリカ人、ユダヤ人、日本人、アジアの人々...等、様々な視点で主張し合うディベートの行方は最終ラウンドまでシーズンゲームが続きます。観客の皆さんはまるで、スポーツ観戦をしているかのようなハラハラ、ドキドキ感を味わうことでしょう。また、各チームの提示する写真や図表の資料が舞台後方のスクリーンに投影され、観客の理解を助けます。そして物語の終盤には、予想を裏切る大どんでん返しが...

劇団うりんこがおくる『ある晴れた夏の朝』は、中高生にとって「平和をつくること」が自分事となり、自身の未来に照らして考え続けるよう影響を与える作品です。中高生の皆さんが「戦争と平和」について、自ら考え意見を持つ機会を提供します。

feature
作品の見どころ



voices

- 感想
- ▶ 戦争の辛さや、差別や偏見などを考える機会は沢山あり、自分でもよく知っている方だと思っていました。しかし、8人のスピーチを聞いて、もっと知るべきこと、正しく理解すべきことがあると改めて考えさせられました。
- ▶ 見る前に、「絶対否定。肯定なんてありえない(怒)」と思っていた自分の気持ちに涙がでてきました。なんでだろう。圧倒されました。言葉にできません。
- ▶ 討論会の会場の観客として舞台に参加している気持ちにもなり、とても感情移入してしまいました。
- ▶ 自分の中の怒りや憎しみがある限り、争いは無くならない。一人一人の問題なのだとすることにハッとしました。人を傷つけること、それに“是”はない。
- ▶ 沢山考えました。そして、感じました。皆いろんなものを抱えて生きている。だから、意見も感じ方も様々。外から見たら当たり前だけれど、本当にわかり合えるのは難しい。そんなことを丸ごと感じられる舞台でした。
- ▶ シェラシエラを見て抱いていた「日本の原爆」を語るイメージと違い、外から、人種も国も年齢も想像を超えた人たちが語る場に立ち会った気がします。肯定と否定というジャッジすら不要に思えた、発言者たちの最後の姿に心打たれました。
- ▶ 討論するのはあまり好きではないなあと思ったのは良いか悪いか、勝つか負けるかになる感じがしていたのですが、相手の話をちゃんと聞いて考える、考えが変ってもいい、自分の中にできた問いに向き合ってみる、すごくステキな事なんだなあと思いました。「話す」ことをもっと身近に感じたい、話してみたいと思いました。



日本の子ども達と話をしてみたいです。
平和について、原爆について。